

# 隠岐国守護佐々木氏について

新井孝重

## 【目次】

はじめに

### 一 守護所と配所

- 1 守護所「別府」の成立
- 2 国分寺配所説の疑念
- 3 「後醍醐」伝承の歴史性

### 二 海に生きる守護

- 1 佐々木氏の系譜
- 2 鎌倉での勢威
- 3 国衙船所の掌握

### 三 鎌倉の滅亡とともに

- 1 出雲佐々木氏の思惑
- 2 海に漂う清高父子

むすび

## はじめに

隠岐の歴史は後鳥羽上皇と先帝後醍醐の配流を中心に語られてきたが、かれらを島に迎え預かり、警固にあたった武家の側については、あまり考察されることがなかったようである。ここではともすれば見落とされがちな、先帝後醍醐の警固にあたった武家に関心の目を向けたい。そこでまず、これまで武家と切り離され、孤立単独に論じられてきた王家の配所を、逆に警固する守護所と関係づけ考えてみたいと思う。幕府機関としての守護所の役割からみれば、それと王家の配所とは大きな関係性があつたはずである。したがって守護所の位置についても、これを明らかにすれば、これとの関係で先帝後醍醐の配所の位置も高い確度で推定できると思われる。後鳥羽上皇の在島時には、守護所はいったい隠岐島のどこに置かれていたのか。まずはこのことを考察し、ついで先帝後醍醐の配所について論ずることにする。

つぎに王家の配所を預かる隠岐佐々木氏が、鎌倉

政権内部にあつて端倪すべからざる力を持った様子がかがえるが、このことの背景にはなにがあるのかを考える。国衙系の海上交通組織「船所」との関係で考えてみたい。隠岐佐々木氏は海上交通組織を吸収することで、交易を基盤とする財力を持ち得たのではなかったか。三つ目として同族の出雲佐々木氏と隠岐佐々木氏が、元弘戦乱期にたがいに敵対する陣営に属し、隠岐の佐々木清高は一方の鎌倉と運命を共にして滅んだ。同族内の分裂した行動には何があつたのか。このことも隠岐佐々木氏を観るのに欠かせない論点である。

先般（2023年7月25日～28日）わたくしは隠岐島に渡り、島内を歩いた。本稿はそこで得た感想をもとに、隠岐佐々木氏について考えたひとつの試論である。

## 一 守護所と配所

### 1 守護所「別府」の成立

隠岐島は島後（現隠岐の島町）と島前三島（中ノ島＝海士郡〈現海士町〉・西ノ島＝知夫郡〈現西ノ島町〉・知夫里島＝知夫郡〈現知夫村〉）、その他無人の島々からなる島嶼の総称で、古代律令制のもとでは山陰道に属す一国を構成し隠岐国とよばれた。隠岐国は鎌倉打倒を企てた王家の二人（後鳥羽上皇・先帝後醍醐）までが配流されたところである。隠岐国が中央政界の大物の流刑地であることを考えれば、とうぜん同国に補任された守護には、他の国の守護人にはない役割が存在したはずである。（もちろん後鳥羽第一皇子土御門天皇の配流地土佐国ならびに阿波国、第三皇子順徳天皇の佐渡国などの守護にも当てはまることではある）。すなわち王家の配所を警固し監視するという、鎌倉幕府にとってはすこぶる重要な役割が、隠岐国守護には課せられたのである。このことは鎌倉末期の守護佐々木清高に

みられるだけではなく、後鳥羽配流のときの鎌倉前期の守護からもみられることがらであった。そのことを考えるために、まず次の史料に目を向けたい。

#### 注置

都万院堺事

四至

「東限 保土島柄峯

「西限 神船岸片着石窟

「南限 座着神島 形島白戸苞宜島

「北限 末路二本杉焼杉

右彼四至堺事、或那具或加茂雖淨之、各無其謂、就中那具先頭刑部尉重基父子共、彼堺之事致諍令訴訟之時、去貞永元年八月下旬之比、当守護宇賀郷入部之時、那具地頭代公文百姓列参之時、無異論之由申切畢、然者彼貞永元年自八月下旬之頃、至仁治貳年辛丑十箇年之間、都無其沙汰、而今地頭代沙弥本願致非分論条、頗無謂歟、次賀茂堺事、旁無謂以同前也、仍當地頭代中内兵衛尉季茂、寛元貳年甲辰十月十五日戌時、彼季茂不可致堺論之由、於守護前、奉懸杵築大明神之誓言畢、然者都万道理顯然也、所詮

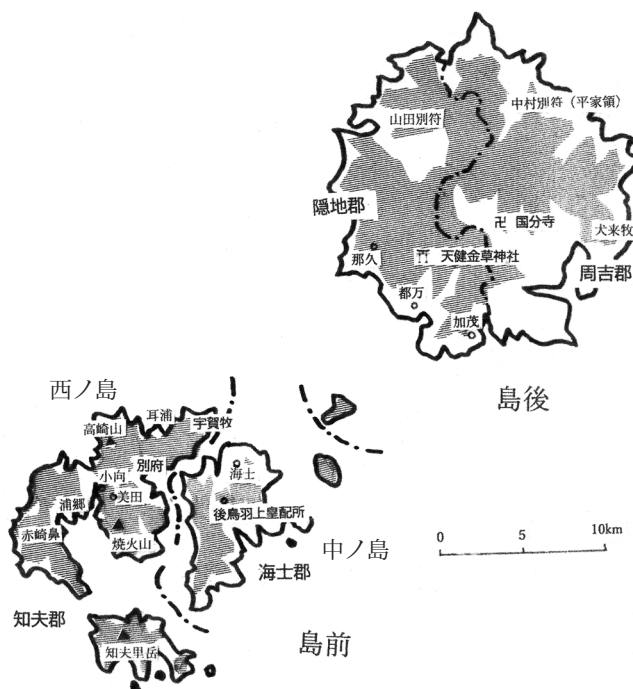
互非論沙汰而後無詮、且當八幡大菩薩可任御智見、仍為末代所記置之状如件、

寛元四年丙午九月朔

右者書板表而、以有于神殿、為私考書写之而已、且改文字錯乱置之、

(四至に付した「は、原本の記載が一行に書き連ねてあるのを、適宜改行して配置したことをあらわす)<sup>(1)</sup>

上掲の史料は島後の在地の天健金草神社にのこる境界相論関連の文書である。近世の写しであって、誤読から来る意味不明瞭のところがあるが、文書自体に疑う点はなく中世史料としての価値をいささかも欠くものではない。隠岐に残る中世文書としては稀少にして、現地の守護の動静を伝える珍しい史料というべきである。それにもかかわらず、この文書を紹介した旧『島根県史』第六卷(1927年刊)は、なぜかそこに含まれた守護の動静には関心を寄せず、たんに神社の由緒と社領境域の紛議を論ずるばかりであった。だがこの文書の注目すべきところは、1行にも満たぬが下線部にある。このわずかな部分に初めて注目したのは西ノ島町編纂の『隠岐西ノ島の今昔』(1995年刊、以下『今昔』と略す)で



【隠岐国概略図】

あった。同書の筆者はこの部分を根拠に、守護が後鳥羽監視のため貞永元年に島後から島前宇賀郷に移ったこと、そしてなぜ島前宇賀郷に移ったかという、そこには以前から島後の国衙役宅が移っていたからだ、という仮説を提示された(383頁)。島後から守護が移ったとか、移ったところの宇賀郷にはその前に国衙役人の居宅があったとするなどは、わたくしとは見解を異にするが、上掲の史料下線部に注目し守護の動静を後鳥羽上皇の監視と関連づけたのは慧眼というべきである。

＊

さてそれでは守護佐々木氏の動静について、以下上掲史料の下線部のところから私見を述べることにする。まず貞永元年(1232)8月の下旬、宇賀郷へ入部した守護正員は佐々木義清であった(『明月記』嘉禄3年3月11日条。当該文中の「彼の国を守護す」の文言を守護職補任の根拠とした)。彼が島前西ノ島の宇賀郷に入部したのは、『今昔』が云うように、島後から移ったのではないだろう。そうではなく、かれは鎌倉から赴任してきて、宇賀郷に直接腰を据えた(着任した)ものと思う。義清は同じ佐々木氏ではあっても、最初に守護となった佐々木定綱とは系統を異にする。島後にはその定綱の屋敷があったはずで(後述)、義清はこれを避けて直接宇賀郷に入ったとみるほうが自然である。ただし上皇の配所が中ノ島(海士郡)であることを考えると、『今昔』の指摘するように、守護義清の入部地がなぜ中ノ島ではなく西ノ島(知夫郡・宇賀郷)なのかという問題に直面する。おそらくその理由は上皇行在中ノ島に、すでに国衙在庁の田所氏が盤踞していたからであろう<sup>(2)</sup>。西ノ島が中ノ島を管制下におく地勢的条件をもつこと(後述)を考えれば、守護が中ノ島を避けて西ノ島に入部するのは一向に支障なく、むしろ妥当であったと考えられる。義清は島後や中ノ島の先住武士の屋敷を避けて、新規に未開の地を望んだのだろう。

ところで守護義清が宇賀郷に入部したときは、後鳥羽上皇が配流(1221)されて、すでに11年もたった。このことも入部が後鳥羽警固を目的にしたものであったか疑わせるかもしれない。しかしこれとても一つには義清が後鳥羽上皇配流の時点から、すでに上皇に随行していることにみられるように(「皇代暦」『大日本史料』第五編之一、47頁)、

義清と上皇の関係がはじめから出来上がっていたこと、二つには鎌倉前期の幕府による地方行政が在庁に依存していたように、たとえば一国単位の国家的な田文を幕府が国衙在庁に調進させていたように<sup>(3)</sup>、上皇の警固も長らくは在庁に委ねていたと考えれば、相応の時間が経過していても不自然ではなく、幕府役人(守護義清)が遅れてきて上皇警固の任についたと考えてもおかしくはない。さればこそ義清が国衙系役人をさけて西ノ島宇賀郷にはいったのも合理的に理解できる。また在島19年にして上皇が亡くなったとき(延応元年・1239)、守護が詳しい報告を(鎌倉か朝廷に)している<sup>(4)</sup>。これも貞永元年の入部に対応する当然の役割であった。

なお貞永の頃(1230年代)の島後では、上掲史料のごとく天健金草神社領と隣村那具(那久)との間で紛争がおきており、那具の地頭代・公文・百姓らはおのれの訴えのために、守護の入部した島前宇賀郷に列参している<sup>(5)</sup>。守護が島前にはいったのは、島後住民の紛争調停より、(形式的とはいえ)上皇の警固を優先したからとみる以外にはない。ともあれここでは、守護義清が鎌倉から隠岐に来国し、島前西ノ島の宇賀郷に入ったこと、その目的が後鳥羽上皇の警固のため(近侍するため)であったことの二点だけを確認すればよい。

＊

佐々木義清が島前に入部したことが、腰を据えたということであるなら、当然そこには守護所が置かれたに違いない。ではその守護所が置かれたと思われる島前宇賀郷とはどのような処であったのだろうか。古代末期の宇賀は宇賀牧とよばれる平家領であったが没官され、文治4年(1188)源頼朝は宇賀の「牧」の部分以外は非平家領であるとの朝廷側の意向に沿って、国衙の進止下にいられている<sup>(6)</sup>。この国衙の進止下に編入された部分(国衙領)が、守護入部の宇賀郷であったのだろう。いまの宇賀地区は山とこれを囲む海だけで、牛を飼う牧にはふさわしいが、上皇配流との関係で守護が入部したのであれば、そこは警固のために海上交通至便の地(舟がはい入江)で、なおかつ守護所の屋敷を設営できるような、平坦な土地でなければならない。そう考えると今の別府地区以外に、中世の宇賀郷は想定しえない。

江戸時代の別府には代官屋敷と高札場が置かれ、

これを中心に島前全域（海士郡・知夫郡）は統治されていた<sup>(7)</sup>。西ノ島が中ノ島ほか周辺諸島を管制下に置いたのは、もともとそうするのに都合の良い地勢的条件が、西ノ島に備わっていたからである。わたくしは別府の統治機能の淵源はふるく、かつての守護所が置かれたことに系譜を引くと考えている。守護が国衙領の宇賀郷にはいったとき、島後の国府の一部も当然宇賀郷に移ったであろう。それ以来ここは別府と呼ばれることになったのであろう。一般に別府は別符とも書き、別納の徴符・免符の文書によって本来の領有者以外の給主に、公領（または荘園）内での賦課物を取得する権利を認められた土地のことである（『国史大辞典』「別府」の項）。けれども島前の「別府」は文字通り、国府から離れた別の府（役所）のことであつたと思われるのである。そう考えれば、「隠州視聴合紀」に「古、嶋後より一小吏を遣はし、嶋前の事を知らしむ。故にこれを別府といふ」とあるのも、まったく根拠のないものとも云えなくなる。ここでは守護入部の「宇賀郷」が江戸時代の島前支配の拠点で、ここに守護所と国府の一部が置かれて「別府」と呼ばれるようになった、という論を確認しておきたい。

## 2 国分寺配所説の疑念

笠置山挙兵（第Ⅰ次討幕挙兵）に失敗した後醍醐天皇は、元弘2年（1332）皇位をはく奪されて隠岐に流された。守護人佐々木清高はこれに先立ち、「御所以下用意のため」隠岐に渡海した<sup>(8)</sup>。そのとき彼が受け入れの用意をしたところはどこだろうか。受け入れの用意というのであるから、そこがすなわち後醍醐の行在所（配所）になったのは間違いない。と、なると後鳥羽のときくらい守護所の置かれた、西ノ島の別府にわたくしたちは想到するであろう。しかし『太平記』、『梅松論』、『増鏡』、あるいは既存の古文書を検するに、先帝後醍醐の配所が別府であつたとは書いてない。それどころか史料によっては、島後の国分寺であると書かれている。ために今では島後国分寺を配所とみる説が定説となっている<sup>(9)</sup>。しかし前節の考察を前提にすれば、島後国分寺に先帝後醍醐の配所があつたとする説には、当然にもはたしてそれが正しいのかという疑念が浮上する。そこで島後国分寺の説を「定説」なら

しめた、いくつかの根拠から検討してみたい。そのさい配所国分寺説に疑問を呈し、その根拠を批判的に検討した地元史家の藤田一枝氏の研究<sup>(10)</sup>に注目し、これを参考にしつつ考えてみる。まず西源院本『太平記』（兵頭裕己校注本・岩波文庫）の次の一節（第四巻「呉越闘ひの事」）をみたい。

佐々木隠岐前司貞満（正しくは清高）<sup>こうのしま</sup>府島と云ふ所に黒木の御所を作つて皇居となす。（中略）昔の玉楼金殿<sup>ぎよくろうきんでん</sup>に引き替えて、竹の椽<sup>たるき</sup>の憂き節繁きを、松の扉<sup>とぼそ</sup>の明け暮れは、御涙を催す便りあり。鶏人<sup>けいじん</sup>の曉を唱へし声、守護の武士の番を催す声に替はりて、御枕の上に近ければ、夜の御殿に入らせ給ひても、つゆまどろませ給はず。

右の一節は配流された先帝後醍醐の身体を取り巻く情景を、居所の黒木、竹の椽での建付け、松の門扉などでよく表現している。だが、これは想像の範囲内で可能な描写である。そして黒木御所（配所）がどこに建てられたかという肝心のことになると、「府島」という以外には何も語らない。かかる描写に注意をすると、はたして作者は現場を見ていたのだろうか、と思えてくる。先帝の配流先の表記が、漠然と「隠岐国」一般にとどまっているのも、同様の疑問を抱かせる。作者がその先を考えるとしたら、せいぜい国の中心は国府であるから、配所はそれのある島、すなわち「府島」島後であるといった程度になるのかもしれない。

＊

『増鏡』の第十九「久米のさら山」（近世写本）には次のごとくある。

昔の御跡はそれとばかりのしるしだになく、人のすみかもまれに、おのづから海人の鹽やく里ばかりはるかにて、いとあはれなるを御覧ずるにも、御身のうへはさしおかれて、まづかの古へのことおぼしいづ。（中略）今はた（ゝ脱力）更にかくさすらへぬるも、何により思ひ立ちし事ぞ、かの御心のすゑや果し遂ぐると思ひしゆゑなり、苔の下にもあはれとおぼさるむかしと、よろづにかきあつめつきせずなむ。海づらよりは少し入りたる国分寺という寺をよろしきさまにとり拂ひて、おはしまし所にさだむ。



【意識】昔の後鳥羽院の御跡はそれと分かる<sup>しるし</sup>標さもなく、人家もまれで自然目に映るものとしては海人の鹽を焼く里だけが遠く連なっている。たいそう物哀れな景色を、先帝後醍醐が御覧なさるにつけても、御身の上は差し置かれ、まずは昔の後鳥羽院のことを思い出しなさる。(中略) いまはただこのように漂うのも、(北条氏討伐の企てのためであるが、その企ても)何によって思い起こしたことか、それもかの上皇の御志の末を果たしとげるかと思ったからである。それ故昔の下においても、いとおしく思っ下されるかと、あれこれと思い巡らされた。海辺からは少し入り込んだ国分寺という寺を、然るべきように取り払い設えて、そこを「おわしまし所」(行在所)とさだめた。

この一節には排除できない事実と、思い込みや伝聞の類とが組み合わさっているように見える。つまり前段の描写には先帝後醍醐の心境にことさらアクセントを付けようとする『増鏡』筆者の意図も窺えようが、後醍醐が後鳥羽上皇と心を通わせるべく、わざわざ上皇の標もない跡に思いを巡らせている点は注意すべきかと思う。ここの描写は後醍醐が上皇の配所である中ノ島(海士郡)を通して配所に向かっていることを表している。そこは島後からは離れており、西ノ島には近い。前節でみたように西ノ島は守護所が置かれたと目され、中ノ島は西ノ島の管制下にあった島である。もし後醍醐が中ノ島を通過したのであれば、そこからさらに向かった先が、西ノ島(守護所所在地)であったと自然に考えられる。そうであるとすれば、後段の描写は思い込みか伝聞の可能性を排除できなくなると思う。後段の「海づらよりは、少し入りたる国分寺といふ寺を、よろしきさまにとり払ひて、おはしまし所にさだむ」というのは要領を得ているが、配所を「国分寺」とするのは、これより前の描写(前段)との繋がりを切ってしまうように思える。ひょっとしたら、後醍醐が中ノ島に向かったにもかかわらず、『増鏡』筆者は離島の行在所たりうる建物としては、寺院しか思い浮かばなかったのかもしれない。そのうえ配流の先帝を警固するのが国府役人と考えれば、そうした都人の先入観から、国府近傍にあるはずの「国分寺」を記し入れても不思議では

ない。

＊

そもそも隠岐国分寺は中世を通じていちじるしく荒廃していたらしい。時代は下るが永正4年(1507)には棟も梁も柱根も腐りはてていた。それを僧憲瞬が各方面に働きかけて、大工事の末に再興を果たした<sup>(11)</sup>。このため今の国分寺の開祖は憲瞬となっており(堂内の憲瞬位牌に「当寺開祖」とある)、その前の住持は歴代不明である。僧が住まなくなって、寺の記録が絶えたことによるのだろう。永正4年の状態が200年近く前(鎌倉時代末期)の状態をただちに表すかは注意を要するが、律令財政の解体とともに官寺仏教が衰退する、中世の一般的傾向を念頭に入れば、鎌倉時代の国分寺が荒廃に帰していたのは十分に考えられ、先帝後醍醐の配所となる条件を備えていたかはすこぶる疑わしい<sup>(12)</sup>。しかも江戸時代の「隠州視聴合紀」、『増補隠州記』<sup>(13)</sup>はもちろん、寺の由来を宣揚する(堂舎再建の奉加を募る)ために作った、勸進帳の原案ともおぼしき憲瞬置文にすら、先帝後醍醐の逗留のことはさらにみえない<sup>(14)</sup>。

しかしそれでも国分寺配所説は、出雲鰐淵寺文書<sup>(15)</sup>を根拠に、牢固として疑われることはないかのようなのである。鰐淵寺の南朝系僧侶頼源是最晩年老耄ゆえに、所持する文書を後住の浄達上人へ伝えた。そのさいに作った貞治5年(1366)頼源送進文書目録のなかの1通に「元弘二年八月十九日於隠岐国国分寺御所 被下之」という注記が施されていた。これが国分寺配所説の動かぬ力となって今に及んでいるのである。だがこの送信文書目録の冒頭には寺務伊福院の自筆である旨(つまり頼源自筆ではない旨)を記した貼紙がある。また熱烈な宮方の頼源が作ったのに、年紀が北朝年号の貞治5年となっているのも不審である。これを勘案すると、送進文書目録の全体は寺務伊福院が整理し作成したもので、頼源所持の1通が隠岐国「国分寺御所」にて下されたというのは、そのときの伊福院の誤認、誤筆ではなかったか、そして署判だけをした老耄の僧頼源がそれに気づかなかったのではないか、という疑念が浮かび上がる<sup>(16)</sup>。僧頼源送進文書目録をもってしても、国分寺が配所であったと簡単に断じるわけにはいかない。

### 3 「後醍醐」伝承の歴史性

島前西ノ島には先帝後醍醐の配流にまつわる多くの伝承が存在する。とうぜん伝承を根拠とする別府配所説ともいべき論説が、現地では大きな声で語られている。わたくしたちはこれをどう見るべきだろうか。国分寺説には文献・古文書（の読み方）に疑点があるが、文献・古文書を持たず伝承だけのこの説にも疑点があって説得性に欠ける。けれども前述したように、別府が後鳥羽上皇のとき以来、守護所の所在地であった、ということを考慮すると、そこが先帝の配所であった蓋然性はがぜん高まる。『増鏡』（第十九「久米のさら山」）が先帝の周囲を「守護というものの、目代よりはおぞましきをすゑたれば」と描写しているのも、守護所がある配所のありようを表わしているのだろう。かように守護所の存在と配所とをかかわらせると、先帝にまつわる別府の伝承はつよい歴史性を帯びることになるのである。

いま別府の玄関口（別府港）から海辺を北東へ2kmほど歩くと黒木御所趾がある。山の斜面を少し上ると黒木神社があり、その後ろをさらに奥へ行くと行在所跡と云われる所に突き当たる。「隠州視聴合紀」はここを「伝に曰く」として、「昔後醍醐天皇しぼら姑く狩（仮力）し玉へる（仮住まいなさった、の意か）所なり、故に今に到りて黒木皇居と云ふ」と記す。『増補隠州記』はさらに詳しく、「黒木の御所と云て、札の辻の東の方へ参町去て、高さ参拾間周り四町の山あり、三方は海にして北は山続きなり、南の方に松えびら竹生す、頂上東西七間南北六間石壁古く残れり、元弘二年後醍醐天皇北条高時か為に被捕、当国へ左遷御在けるに、（中略）この黒木御所を建て迂（遷力）らせ玉ふと云伝ふなり」とする。黒木御所から西麓におりて、耳浦方面の道路をわたり500mほど西へ行くと、同じ丘陵の森の中に「隠岐判官館趾」という石碑の立つ場所がある。「隠州視聴合紀」に「北の小岡に昔の館所あり、今の駅亭（宿所）は其下なり、代官の家此にあり」という記述があるから、おそらくこれをもとに島根県教育委員会は、隠岐判官清高の屋敷に比定したのでろう<sup>(17)</sup>。

佐々木氏の守護所がこのあたりであったと想定すると、同じ丘陵伝いに存在する千福寺という廃寺跡の存在も興味深い。維新廃仏の災厄をこうむり堂舎

は廃滅し、いまは夏草が生い茂るだけであるが、丘陵ふもとのこの平場には一瞬息を呑むような五輪の塔が幾つも並んでいる。どれも風化が進み、表面が剥離しているため、読める年紀はないが、その形式と佇まいはあきらかに古い<sup>(18)</sup>。この寺域の叢（今は民家の墓になっている）にうずもれた五輪塔を見ると、ここに鎌倉時代から寺が存在したと考えるのは十分に許されると思う。そしてその寺が別府を根拠地にした佐々木氏と無関係であるとは思えないのである。

島前の黒木御所関連の伝承はこれだけではない。先帝後醍醐が配所を抜け出して、島を出奔するまでの道すがら、その場にふさわしい、まことしやかな伝承や遺跡が点在する。地元の言い伝えによると、先帝がとった逃亡の道筋は美田尻方面を西にすすみ、ひたすら浦郷湾をめざしていた。高崎山と焼火山たくひやまの間に挟まった緩やかな峠道を越えて、みえてきた小向こむかいの在家に通じるまっすぐの道を、むかしはヌクイといった。歩けなくなった先帝を土地の男が背負い、その男の背中がこのあたりで暖まったからだという。そして小向の旧家木村家の庭先には先帝を休ませた「御腰掛の石」がある<sup>(19)</sup>。そこで小休止した先帝は赤崎鼻というところから、商人舟に乗って島を離れたのだという。

土地の伝承では先帝の向かった先が『太平記』とは異なるが（『太平記』では千波湊とする）、一つひとつの伝承が地域のなかではつながりをもって幾つも点在している。だがかかる伝承の真偽をいくつ問うても意味はあるまい。大事なのは伝承が土地と結合して存在している、ただそのことだけである。ここでは以下の論を確認しておきたい。すなわち後鳥羽上皇を警固するために守護所を置いた西ノ島別所の地は、鎌倉末期には佐々木氏の根拠地になっていた。その根拠地に先帝後醍醐の配所を置くのはもっとも理に適っていた。この土地の「伝承」はただ存在するだけで（中身を問わず）、土地の「歴史」（守護所の歴史）と整合し生きてくるのである。



【千福寺廃寺五輪塔 2023年7月27日筆者撮影】

## 二 海に生きる守護

### 1 佐々木氏の系譜

先帝後醍醐の警固に当たった佐々木清高とは、どういう人物であったのだろうか。かれを知るにはまず隠岐佐々木氏の祖から観ていく必要がある。佐々木氏の祖は宇多源氏の流れをくむ源扶義が近江守となって武士化したところから始まる（近江源氏の始まり）。そしてその孫経方が同国の佐々木荘に土着して佐々木氏を名乗ることになる。しかし佐々木氏は在地での抗争に負け、危うく難を逃れた経方の孫秀義は、当時清和源氏の棟梁であった源為義の家人になった<sup>(20)</sup>。為義の庇護のもと、秀義は定綱、経高、盛綱、高綱の4人の子をもうける。

その後秀義は為義の子源義朝に仕えるが、平治の乱で義朝が平清盛に敗れて死ぬ。このため秀義は牢籠の身となった。しかし源氏への忠誠心は衰えることがない。4人の子らは関東のあちこちの豪族に身を寄せながら、それでも伊豆の流人であった源頼朝（義朝子）のもとに結集し、源氏再興と鎌倉幕府創業に力を尽くした。こうした経緯から、頼朝の佐々木氏に対する信頼はあつく、政権が確立されると、

長男の佐々木定綱には本領佐々木荘のほか多数の所領が与えられたうえ、長門、石見、隠岐3国の守護にも任ぜられた<sup>(21)</sup>。そして一門は各地に勢力を扶植し、中・近世武家社会のなかで繁栄することになる<sup>(22)</sup>。

さて、佐々木氏と隠岐国との関係は、秀義の長男定綱が建久4年（1193）隠岐国の守護に補任されたことから始まった<sup>(23)</sup>。この頃の守護には国府近辺を直轄領化することも、在庁の進退権もなく<sup>(24)</sup>、勸農や土地管理（大田文作成）などの公的な支配権は、なおのこと存在しなかったであろう。とはいえそうであればなおのこと、佐々木氏は公権力（国府）に結びつくことから始めねばならず、その意味では先行研究の指摘のように、定綱時代の屋敷が、国府のある島後におかれたのは間違いのないであろう。

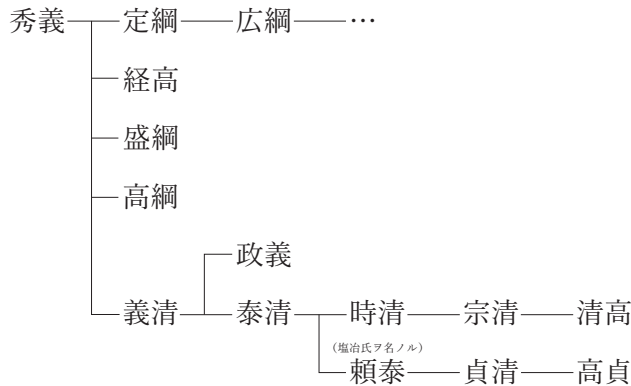
その後定綱の系統のうち広綱父子ら（嫡流）は承久の乱（1221年）で京方に奔り、ために戦後多くが誅せられ衰退する。広綱の弟信綱の系統は六角氏、京極氏となって繁栄するが、この事件（承久の乱・嫡流衰退）がきっかけとなって、定綱ら4兄弟とは異なる五男義清（母は相模国渋谷重国の娘）とその系統が台頭した<sup>(25)</sup>。承久の乱の後義清は隠岐国守護に任ぜられ、嘉禄3年（1227）には隠岐守となった<sup>(26)</sup>。そしてその5年後（貞永元年・1232）にはみずから隠岐国の島前に入部している（前述）。入部時には海士郡に閉居する後鳥羽を慰めると同時に、近侍の国衛役人とともに警固に当たったのだろう<sup>(27)</sup>。しかし翌天福元年（1233）には子の政義に守護職を譲ったようである<sup>(28)</sup>。政義は出雲の守護にして「隠岐太郎左衛門尉政義」と史料上にあらわれる（出雲と隠岐の守護を兼帯するものとしてあらわれる<sup>(29)</sup>）。

その後延応元年（1239）には、政義弟の泰清が後鳥羽の死を見届けている<sup>(30)</sup>。この時点には守護職が泰清に移っていたことを知る。そして建長2年（1250）12月には、兄の政義は鎌倉で三浦義村と諍い、それがもとで所領を没収され泰清に所領はうつされた<sup>(31)</sup>。力を強めた泰清のもとで、佐々木氏の出雲・隠岐両国守護職兼帯はそのまま続くかと思われた。だが泰清の子時清が幕府中枢部の権力抗争に巻き込まれ、嘉元3年（1305）に鎌倉で横死すると<sup>(32)</sup>、時清と弟頼泰の二流の子孫が隠岐・出雲の両国を別々に知行することになっていった。すな

わち時清の遺跡隠岐国守護職は時清の子宗清、そして清高へと引き継がれ、頼泰の系統は出雲国の守護職を相伝して家名を塩冶（塩屋）と称することに

なった。ここに現れる（時清の系譜の）清高こそ、先帝後醍醐の配流と警固の役に携わった人物である。

【佐々木氏系図】



## 2 鎌倉での勢威

鎌倉後期になると北条氏得宗は政権中枢を掌握するいっぽう、全国の地方支配組織を一門で独占し専制化を強めていった。とくにモンゴル戦争を経てからのち、それは猛烈な守護職獲得の動きとなってあらわれた。はじめ（頼朝没後）わずか2～3か国にすぎなかった北条氏の守護国は、鎌倉末期にはじつに30か国を数えるほどであった<sup>(33)</sup>。北条氏に守護職を奪われた多くの守護は減ぼされ、あるいは貶せられ守護階層から脱落していった。そのようなきびしい時代に、佐々木秀義五男義清の系統は、山陰方面の（特にモンゴル戦争期には）軍事交通上の要衝である出雲・隠岐の両国守護職をよく維持し続けたのである。

時清は、建治元年（1275）7月、はじめて引付（1249年設置の訴訟機関）に参仕し、弘安6年（1283）には評定衆に列している<sup>(34)</sup>。そして宗清の子清高には、祖父以来の鎌倉での地位を踏襲することによって、よく北条氏に伍し、みずからの政治的存在感を高めていた様子がうかがえる。かれは隠岐守と検非違使判官の肩書を持ち、さらに「一級」（いかなる官位の「一級」昇格かは不明）を望んで、幕閣にして官途奉行の摂津高親に朝廷への推挙を所望している<sup>(35)</sup>。また鎌倉では祖父時清が担当した引付の任についていた。こうしたことはかれがたんなる御家人ではなく、幕府吏僚として有力な地位に

あったことを示している。

さらに清高は元弘元年（1331）には、笠置合戦の戦後処理にあたり（『太平記』巻ノ三）、西国の討幕反乱が激化すると、今度は関東から大軍勢の一員として上洛している（『太平記』巻ノ六）。そのうえで政権の危機がせまると、今度は分国の隠岐へ飛び、先帝脱出を警戒し、警固の武士の指揮にあたった。それにしてもいかに鎌倉創業時の功臣の一族とはいえ、その傍流である西国隠岐の佐々木氏が、北条氏によって潰されることなく、守護として生き長らえたのはなぜだろうか。これは隠岐佐々木氏の特質を考えるうえで、大きな問題であると思う。そこで注意すべきなのは、隠岐佐々木氏が累代にわたり他氏の介入をゆるさない、固有の強みを分国隠岐にもっていたのではないか、ということである。

## 3 国衙船所の掌握

これを考えるには、まず佐々木氏の辿った分国支配の軌跡を観る必要がある。佐々木氏が隠岐の支配に本腰を入れたすのは、義清が宇賀郷（=のちの別府）に守護所を置いてからである。しかしそのあと佐々木氏はひとつの苦難に見舞われる。貞永2年（1233）に島内で反乱事件が起き、守護代の八島冠者なる配下の者が、正員守護政義（出雲在住か）に敵対し、出雲から派遣した別の守護代を殺し、一島に城郭を作るに及んだのである。このことは「若及



重事者弥為天下之煩歟」と懸念される騒ぎとなり、六波羅の使者は京都と出雲のあいだをしきりに往復した<sup>(36)</sup>。この事件は島における佐々木氏の政治的不安定を表していた。義清自身が島前に入部したとはいえ、その後の実態は代官による上皇警固と守護本来の限定的な業務<sup>(37)</sup>にとどまっていたのだろう。島の支配を安定化するには、隠岐の公的な人材と経済を直接に組織する以外にはない。そのためには国衙「船所」の掌握がどうしても必要であったはずである。宝治2年(1248)に、佐々木氏は田所義綱なる者に「船所」の沙汰職を宛て行った<sup>(38)</sup>。義綱の姓「田所」は国衙の田所に由来する。国司不在の国衙には国務を分掌するいくつもの「所」があり、そのなかの一つがほんらい馬上帳や官符をもって田地坪付けを勘合する田所であった<sup>(39)</sup>。

佐々木氏は田所義綱にたいして、田地行政の沙汰権ではなく、船所の沙汰権を宛て行った。この時代には船所沙汰権のほうが田所沙汰権よりも、佐々木氏にとっては大きな意味があったのだろう。別言すると、狭小な島の耕地を支配する(農業生産に依拠する)田所より、海上交通を支配する船所を掌握するほうが、経済的にも政治的にも、また軍事的にも大きな意味があったということである。かかる佐々木氏の方策の前提には、田所氏自身が、すでに農地の支配者であるより、海の支配者になっていたのであろう。

(花押)(佐々木泰清)

下 田所義綱所

宛行 隠岐国船所沙汰事

右、於件沙汰者、任相伝所宛行也、有限色々役物之沙汰等、無懈怠、可令催沙汰之状如件、  
宝治二年四月二十五日

船所は西日本沿海部の国々に多く置かれた国衙の分課で、その業務の中心は官船を管理し正税官物を輸送するところにあつた。だが一方で官使や院の海上利便提供のため、船を必要に応じて点定し、また船の労働力(永主<sup>かこ</sup>)を沿岸住民から徴発することもしていた。やがてそうした公的権限をつかつて、船所の役人は荘園の船、人夫を差し押さえ、おのれの力を強めるようになる<sup>(40)</sup>。隠岐国「船所」が「色々役物」(船所諸役の役得)を懈怠なく催し沙汰して

いるのも、中世船所のそうしたあり方を表しているのだらう。佐々木氏は船所の管理を海の支配者田所氏にゆだね、国衙系の海上交通組織を押さえた。結果として在庁を家臣化するだけでなく、「色々役物」取得をもって、おのれの経済基盤にしたものと考えられるのである。また、海上交通組織を押さえたことは、日本海の遠隔地交易にもつながったことを意味した。それは島の経済にとどまらない、広い基盤を佐々木氏が持つことでもあった\*。元亨3年(1323)、佐々木清高が北条貞時十三年忌のための円覚寺法堂供養に参列し、砂金百両、銀剣一腰の進物を出しているのは<sup>(41)</sup>、こうした日本海の基盤が生み出す、財力的一端を表わしているのではなからうか。ここに隠岐佐々木氏の強みの源泉があったとみられるのである。

\* 中世の武家領主は多かれ少なかれ、商業民の要素を本来的につき従えていた。ことに佐々木氏のばあいは、遠祖秀義の時代から、経済学でいうところの前期的資本(前期的商業資本)の要素を包蔵していた。秀義の母と奥州の覇者藤原秀衡の妻とは同母の姉妹であつて、共に安倍貞任の娘であつた。この血縁関係がもとになって、秀義は主君源為義の使者としてしばしば奥州へ赴いた。矢羽根となる鷲羽と強い馬を調達するためであつたという(奥富敬之『天皇家と源氏』吉川弘文館、三一書房版の復刻、2020年、93-94頁)。だが秀義の奥州行は、表向きは為義の命によるものだけれども、わたくしにはそれだけではなかったと思える。彼は土地に根を持たず漂浪の人生を送り、定綱以下の子どもたちも同様に浮動する生活を送っている。平安時代には「東ハ臻俘囚之地、西ハ渡於貴賀之島」り唐物・本朝の沈香、麝香、朱砂、胡粉、金銀、水精、琥珀、水銀、硫黄、絹布、緞繻などを交易売買する商人がいた(『新猿楽記』『群書類従』第九輯、文筆部)。伝承ではあるが京三条の金商人吉次も、京都と奥州のあいだを往復して富を積む人間であつた(『義経記』東洋文庫)。こうした遠隔地間を動く商業民の性質は、尾張国知多半島に根拠地を置いて太平洋沿岸を東に西に舟で往来した長田忠致にも見いだされる。かれは「大徳人」と云われる商人武士であつた(拙著『中世日本を生きる』吉川弘文館、2019年、110-137頁)。中世の武士にはこうした商業

民の要素を持つものが多くいて、佐々木秀義もそうした武士の一人ではなかったかと思われるのである。そもそも源頼朝はこうした物持ちの商人武士を配下において、はじめて京都との折衝に成功し、政権樹立をはたしたのではないか。頼朝が上洛したときの院や公家への莫大な砂金その他工芸品などの捧呈は、関東御分国や関東御領の正税・年貢（つまり多くは米・布）で直接賄えるものではない。米・布を各種贈答品に換える商業がなければならぬが、鎌倉にはまだ交換経済を可能にする商業都市が出現していない。（鎌倉に商業的都市景観が現れるのは頼朝以後で、源家三代以後の新しい政治体制の形成とともに都市鎌倉の姿は急速に整えられていった〈『武士の都・鎌倉』平凡社、1989年、石井進執筆部分、32-34頁〉。現在の鎌倉の地に鎌倉初期の商業都市の遺構が発掘されていないのはこれと符合する）。そうであるならモノの形をとって家ごとに蓄財する、遠隔地交易の商人武士（前期的資本）こそが、頼朝には必要であったのではなかろうか。

### 三 鎌倉の滅亡とともに

#### 1 出雲佐々木氏の思惑

元弘3年（1333）春に起きた討幕反乱は、大きな波となって畿内全域を覆っていった。この反乱の禍源は先帝後醍醐の存在にある。清高は隠岐国のみならず、同じ佐々木氏の管国出雲国からも御家人を動員し厳しい警固をはかった。しかし宮方同調の武士による意識的な懶惰もあってか、警固の実態は必ずしも嚴重なものにはならず、むしろルーズでさえあった。一般の警固武士の耳にも様々な噂が入ってきて動揺を生んでいた。このため「御垣守にさぶらふつわものども」は、脱出しようと企てる先帝の様子をほのかに悟って、「靡きつかうまつらむ」という気持ちを抱くことになる。そして同心の者たちだけで相談し、先帝を連れだすこととなった<sup>(42)</sup>。『太平記』はこのことをもう少し詳しく、出雲国の佐々木一族富士名義綱に焦点を合わせ述べている。富士名は畿内西国の諸族の動きを逐一詳細に先帝後醍醐に告げ、それから先帝には密かに島を出られ、出雲か伯耆の浦にでも船を寄せ、待っていてください、

恐れながら攻めまいらすふりをして、すぐに味方に参ります、という。このとき流布本系の『太平記』では、富士名は出雲国に戻り守護佐々木（塩冶）高貞を語らうが、塩冶はなにを思ったか富士名を監禁して隠岐国へは返さなかった。いつまでたっても富士名は戻らない。そこで先帝は運に任せて夜陰に乗り島を出たのだという。

ところでこうした警固の者の動きが、行き当たりばったりであるのは分かるが、富士名の行動には何か奇怪なものを感じる。それは彼があらかじめ出雲国の佐々木（塩冶）高貞と牒じ合わせている。そしてその高貞本人は出雲に在国しながら、しかも隠岐の警固にかかわっていない。富士名による先帝脱出の工作はじつは高貞の考えではなかったか。もともと佐々木氏の頼泰―貞清―高貞の系統（塩冶氏）は幕府の要職にだれも就いた形跡がない。一方の時清―宗清―清高の系統（隠岐佐々木氏）は、幕府中枢の引付衆、評定衆にはいって、北条氏からも尊重されている。この家勢の違いから高貞の清高への嫉妬なり憤懣を想定するのは飛躍だろうか。高貞が嫉妬・憤懣を抱いているとき、元弘の動乱が勃発したのであれば、この動乱に乗じて隠岐佐々木氏に対し、何かを考えてもおかしくはない。そのさい隠岐の清高が鎌倉の重臣であるのだから、高貞は宮方と力を考えるのは当然であろう。だから清高の船上山合戦での敗北を知るや、塩冶高貞は公然と宮方の軍勢となってあらわれた。その内に秘めた目的は隠岐佐々木氏の打倒にあったのではないか。

#### 2 海に漂う清高父子

先帝後醍醐の隠岐脱出にたいし、佐々木清高は、ただおめおめと手をこまぬいていたわけではなかった。ただちに兵船を繰り出して先帝を追跡し、船上山にたてこもったのを知ると、軍勢率いて先帝奉ずる名和長年に攻めかかった。このとき清高の軍事力がいかなるものであったかは不明である。それでもかねてより隠岐佐々木氏が国衛系の船所を掌握していたのは大きい。船所は公権をもって民間船舶・乗員を徴発動員できるから、一旦ことがあれば大きな軍事力にもなりえた。壇ノ浦の合戦のさい、周防国在庁の船所は源義経に数十の船を提供して源氏勝利の決定的な力となった<sup>(43)</sup>。佐々木氏の配下に入っ

た船所も、同様の軍事力を提供していたかもしれない。のちに船所の田所氏は隠岐佐々木氏の「執事」となっている。清高の傍に仕え、船上山を攻めるさいには同じ陣中において軽挙な行動をいさめ、作戰の提言を行っている<sup>(44)</sup>。

とはいえ人心の急激な変化を前にしては、清高の兵力は無力であった。先帝が島を出て船上山に立てこもるや、山陰地方では公然と反乱が始まり、討幕の綸旨を受けた諸豪族は、瞬間に北条氏敵対の旗幟を鮮明にした。反乱鎮圧に失敗した清高らは、船上山を撤退して隠岐へ戻る。だがすでに島の国人たちも敵の側につき、津々浦々を固めて清高らを待ち受けていた。かくして隠岐の守護佐々木氏は島から離れ、わずかな兵となって日本海の沿岸を漂うことになる。やがてかれらは越前の敦賀に船を寄せ、そこからいかにしたものか、関東へ落ちる六波羅の一隊と合流し、近江国の番場で全滅したのであった。清高は享年39、子息泰高は18、同高秀は17、同永寿丸は14であった<sup>(45)</sup>。野伏を使い六波羅の軍勢を滅した五宮（守良親王）は、六波羅北方の北条仲時と、東使二階堂ならびに隠岐前司清高の名をあげ、「東夷忽滅亡」に喜びの快哉をあげている<sup>(46)</sup>。いっぽう出雲国守護塩冶高貞は建武政権樹立にともない隠岐守に任ぜられ、建武3年（1336）足利尊氏からは国主の職を切り替える形で守護に任じられたようである<sup>(47)</sup>。暦応4年（1341）には「出雲并隠岐両国守護大夫判官高貞」と記録に見え<sup>(48)</sup>、明確に隠岐の守護職を手に入れていたことが確認される。

## むすび

隠岐国守護佐々木義清が後鳥羽上皇の警固のために、島前の宇賀郷（＝のちの別府）に守護所をおいていらい、累代佐々木氏は別府を根拠地にしていった。王家の人の警固が隠岐の守護固有の任務である以上、先帝後醍醐の配所を目的の届く別府に置くのはごく自然である。島後にはない先帝の伝承が、別府を中心とする島前に稠密にみられるのは、別府に配所が置かれたことによる当然の現象であった。隠岐佐々木氏の島内支配が軌道に乗るのは、守護代の反乱を克服したあと、国衛系の船所を配下に収めてからである。海上運輸と広い交易を経済基盤とした佐々木氏は、豊かな財力をもって鎌倉北条氏に伍す

ことができた。

さて、鎌倉が滅んだとき北条氏と運命を共にした者は、御内人を除いてはほとんどいなかった。一般御家人でこれに殉じたものは発見できないという<sup>(49)</sup>。だが隠岐佐々木氏の最期の守護清高は周辺武士の雪崩うつ裏切りに抗して、ついに3人の子どもを引き連れて滅びさった。なぜそのような生き方（死に方）を選んだのか、限られた史料からは何もわからない。行論のなかでは憶測の域を出なかったが、鎌倉末期の政治動乱の基底には、個々の武士が抱え持つ一族内の敵対が渦巻いていたのではないかと、もともと潜在する人間同士の対立を、戦乱が一挙に顕在化させることは、ままあることである。モンゴル戦争のときも、一族が一番結束しなければならないときに、九州の武士たちはいたところで、遺領や戦功をめぐる、抗争をはじめていたのをわたくしたちは見るのである<sup>(50)</sup>。

- （1）天健金草神社所蔵文書（旧『島根県史』6、371頁所掲）。同文書はいまも天健金草神社に伝存する。内容は村落、相論、誓言、記憶などのことについても興味深い。
- （2）後鳥羽上皇配所（源福寺…今はない）の傍には上皇に近侍し、没後いらい御陵を守ってきた（という由緒を持つ）旧家村上家がある（現在、住宅は海士町の村上家資料館になっている）。同家は宝治2年（1248）の田所氏宛て守護下文を伝えもつから、鎌倉時代には国衛在庁の田所氏を称し、後世になって村上と改姓したものと考えられる。田所氏は後鳥羽が配流されるにともな<sup>そは</sup>って、守護に先んじて国衛役人として上皇の側に配置され、警固にあたった（仕えた）ものであろう。同氏の後裔（？）村上家は江戸時代になって上皇の陵墓が整えられると、その祭祀に深くかかわった。そして明治6年（1873）上皇の霊が水無瀬神宮に遷されて、陵墓が廃せられると、同家は宮内省より火葬所の「守部」に任ぜられた（村上家所蔵明治17年12月27日宮内省発給文書）。
- （3）石井進『日本中世国家史の研究』岩波書店、1970年、118頁～194頁参照。
- （4）「隆祐集」に「（後鳥羽）法皇隠岐国にて崩御、夢とのみ承る後、程へて守護左衛門尉泰清かも

とより（中略）くわしく申し送りて」とあり。  
佐藤進一『鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学  
出版会、1971年、151頁。

- (5) 注(1) 所掲史料。この相論は近世にはいっ  
ても続いたという（西郷町教育委員会主任文化  
財調査委員岩崎ことい氏より教示を得る）。

- (6) 『吾妻鏡』文治4年11月22日条。以下の地の  
文ならびに文書の記載あり。

廿二日辛亥、仲國朝臣訴事、被献御請文之上、  
所下知在庁等給也、

去月廿七日御教書、今月十八日到来、謹令拝見  
候畢、隠岐守仲國申三ヶ条事、是頼朝成敗候  
条、令成進上下文候也、於前司惟頼沙汰中村別  
符者、左右只可有勅定候也、以此旨可令申上給  
候、頼朝恐々謹言、

十一月廿六日 頼朝  
下 隠岐国在庁等

可早令犬来并宇賀牧外宮内大輔重頼知行所々  
国衛進止事

右件所々、依為平家領、以重頼補預所職候畢、  
而犬来宇賀牧外非平家領之由、在庁等載誓状、  
訴国司、々々又依経 奏聞、自 院重所被仰下  
也、早彼両牧外、停止重頼之沙汰、可為国衛進  
止之由、如件、以下、

文治四年十一月廿三日

下 隠岐国在庁資忠

可早遂上洛遵行国司下知事

右件資忠者、為在庁之身、可專国務之處、輩国  
司之命、不上洛、動難済所当課役之由、依有其  
訴自院所被仰下也、資忠所為甚以不当也、早遂  
不日之上洛、可令遵行国務之状如件、以下、

文治四年十一月廿二日

- (7) 「隠州視聴合紀」。この史料は1677年幕吏の手  
になる隠岐国の巡見記である。内容は詳細かつ  
正確な観察で、筆者は相当の学識のある者と考  
えられ、当時の地誌類としては白眉と云われ  
る。『日本庶民生活史料集成』第20巻、三一書  
房、1972年、所収。

- (8) 『梅松論』〈新撰日本古典文庫3〉現代思潮社、  
48頁。

- (9) 古くは吉田東伍氏が『大日本地名辞書』（富山  
房）にて、「隠岐国島後の国分寺の行在なりし  
こと明晰とすべし、島前の知夫里、別府島に行

在を説くは、其言ふ所殆ど信拠なし」と云って  
以来、学者のことごとくが国分寺配所説をとっ  
た。戦後（アジア太平洋戦争後）書籍化された  
『太平記』（岩波日本古典文学大系、岩波文庫、  
角川文庫、新潮日本古典集成）さらに近時刊行  
された岩波文庫版の校注もすべて島後国分寺説  
をとる。島根県は1927年『同県史』で国分寺  
をもって行在所とし、国（文部省）も1934年  
島後の国分寺をもって行在所史跡に指定した。

- (10) 藤田一枝『後醍醐天皇隠岐行在所に就いて』  
海鳥社、1969年。

- (11) 永正十一年甲戌卯月憲瞬置文（隠州国分寺再  
興置文之事）、釈文全文は注(10) 18～20頁  
に収載。

- (12) 注(10) に同じ。

- (13) この史料は1688年代官に提出した村明細の  
書き上げである。『隠岐島史料』近世編上、隠  
岐郷土研究会、1963年。

- (14) 憲瞬置文には「本堂ヨリ西ノ傍ニ地藏堂有リ、  
安徳天皇ノ御祈願ト云フ、次ニ塔婆ハ人王  
八十二代之宇後鳥羽之院ノ御祈願所ト云フ、爰  
ニ本堂久ク大破ニ及ビテ棟梁柱根皆以テ朽損」  
とあり。王家にかかわる伝承には、当寺の権威  
づけのために積極的に記し宣揚する姿勢が見え  
るのだが、後醍醐行在については書かれてい  
ない。

- (15) 曾根研三『鰐淵寺文書の研究』鰐淵寺文書研  
究会、1963年、86号、貞治5年3月21日権少  
僧都頼源送進文書目録状。『南北朝遺文』中国  
四国編第四巻、3461号。

- (16) この見解の大筋はすでに藤田氏が出されてい  
るところである。鰐淵寺文書の評価はそれ自  
体、一篇の論文を要するほどの問題である。こ  
こでは「国分寺御所」の存在を疑う読み方もあり  
うる、という可能性を提起して文書の評価を  
試みた。

- (17) 島根県教育委員会は1958年に黒木御所を県  
の史跡とした。そのときに「隠岐判官館趾」の  
碑も立てたのであろう。詳しいことは西ノ島町  
役場に問い合わせたがわからない、とのことであ  
った。

- (18) 高さは7～80センチほどもあろうか。地輪は  
低く胴部の水輪は球の上下を平たくして安定性



を持たせている。笠の火輪は軒口が極端に厚く、軒先の反りはない。上部の風輪・空輪は一石で造られている。その形式はあきらかに古く、鎌倉から南北朝期をくだらぬものと思われる。藤田氏（注10前掲書）によると、1969年ごろには「古い五輪塔群が数十基」残っていたという。

(19) 木村家にはそのときの下賜の品として愛染明王懸仏と「鳳乳石」〈いかなるものかは不明〉が蔵されているという（町誌『隠岐 西ノ島の今昔』西ノ島町、1995年、384頁）。

(20) 奥富敬之『天皇家と源氏 臣籍降下の皇族たち』三一書房、1997年。のちに吉川弘文館にて再刊、2020年、93頁。

(21) 『吾妻鏡』建久4年12月20日条。「廿日癸丑、佐々木左衛門尉定綱本知行之地悉返給之、其上七ヶ国之内、各被加一所、於隠岐国者、不交他人之沙汰、一円拝領地頭職、至長門石見両国者、所被捕守護職也」とあり。

(22) なかでも鎌倉政権下で地位を得た系統には六角、西条、京極、隠岐、塩冶の5系統が存在した。このうち六角、西条、京極は定綱の次男信綱にはじまる家で、その信綱の子の代で六角氏（その傍流に西条氏あり）と京極氏に分岐する。六角氏が六波羅を拠点とするのにたいし、京極氏は鎌倉を拠点にして評定衆を世襲したという。細川重男『鎌倉政権得宗専制論』吉川弘文館、2019年。なお隠岐、塩冶の系統に関する研究はわずかに川岡勉氏の「南北朝期の出雲と義清流佐々木氏—隠岐、塩冶、富田氏を中心に—」（『松江市歴史叢書』15、2022年）をみるのみである。ただし、この論文は筆者未読である。

(23) 注（21）に同じ。

(24) 定綱が補任されたとき、国府地域は佐々木氏の直轄領とされ、国衙在庁進退権に基づく強力な支配が展開されたであろう、という指摘があるが（中世諸国一宮制研究会〈代表井上寛司〉編『中世諸国一宮制の基礎的研究』岩田書院、2000年）、定綱の頃はまだ島後の国府付近に代官を派遣する程度で、目立った支配の展開はないと考える。なお国府であるが、今のところそれがどこにあったかは定かでない。島後国分寺

に近い甲ノ原遺跡が1979年以来数次にわたり、隠岐島後教育委員会によって発掘調査された。その調査報告書では遺跡の台地上から発見された掘立柱建物群がその規模、配置等から公的建物としての性格の強いものと指摘され、確かな遺物はまだ得られぬものの、国府の跡ではないかという推測がなされている（『甲ノ原遺跡発掘調査概報Ⅳ』1983年3月、島根県隠岐島後教育委員会）。

(25) ここで注意すべきは4兄弟すべて同母ではないから（定綱・経高・高綱の母は宇都宮宗円女、盛綱の母は源為義女）、かならずしも4兄弟と義清の2系統を、異母を理由とするのは正しくない。二つの系統の違いは4兄弟が頼朝挙兵以来前線で戦ったのに対し、五郎義清の系統が將軍近習として終始鎌倉にいたことによる違い、とみるのが妥当のようである。建暦2年（1212）6月、將軍御所の宿直の侍が闘乱し、死傷者数人を出す騒ぎを起こしたとき、佐々木義清は御所宿直のものを搦め取ったいっぽう、侍所別当の和田義盛はこの時にのぞんで御所に「参入」し「捜求与党之輩、糺弾其罪違」したという（『吾妻鏡』建暦2年6月7日条）。これは義清が常時御所を管轄して、ふだん鎌倉市中を管轄する和田とは権限を分けていたことを表し、さらには彼がもっぱら將軍に近侍していたことを示すのだろう。はたして義清の子息政義の代になると、かれは「幕府近習也」と明確に云われている（『吾妻鏡』建長2年12月29日条）。「佐々木隠岐前司義清嫡男」たる義政は、義清の近習の職を踏襲したに違いなく、こうした累代の立場が四兄弟の系統との違いを作り出していたと思われるのである。なお『吾妻鏡』建暦2年6月7日条の重要部分をあげておく。「六月大、○七日辛巳、晴、丑刻、於御所侍所、宿直田舎侍起闘乱、即時死者二人、刃傷者二人也、鎌倉中鼓騒、御家人等馳参、佐々木五郎（義清）搦進之、和田左衛門尉卒数輩子孫僕従等、令参入捜求与党之輩、糺弾其罪違也」。

(26) 『明月記』嘉禄3年3月11日条。「隠岐守源義清、守護彼国、サ、キ左衛門ト云者云々、」とあり。

(27) 後鳥羽上皇配流のとき、佐々木義清は上皇に

供奉して隠岐に下向している（『皇代曆』『大日本史料』第5編之1、47頁）。この時以来のよしみで義清は上皇の世話をしていたのだろう。とはいえ、かれの生活のほとんどは鎌倉にあったから、実際には代官をして世話や警護に当たらせてと思われる。

- (28) 『吾妻鏡』天福元年6月20日条。「○廿日癸巳、出雲国杵築神主眞高及刃傷狼藉之由、彼国守護隠岐太郎左衛門尉政義注進之間、可召進其張本之旨、今日被仰下之上、改神職、以內藏孝元所被新補也」とあり。

(29) 注(28)と同じ。

(30) 注(4)に同じ。

- (31) 『吾妻鏡』建長2年12月29日条。「隠岐太郎左衛門入道心願（佐々木政義）者、佐々木前司義清嫡男、幕府近習也、俄以令出家遁世訖、而若狭前司泰村為北条殿御縁者、殆局武家権柄、已似為諸人之上首、于時心願獨挿異心、就如座着上下之事、度々及喧嘩、始終不得相爭之、出家之企、起於此事云々、於件所領者、賜舍弟次郎左衛門尉泰清、其後心願子息等出生訖、泰村又滅亡、漸有後悔氣之上、為令扶持子息、本領掌之地少々可令和与之由、還雖懇望、泰清敢以依不令諾許之、結局彼子息等企奸訴之處、再往被凝群議、難被許之旨、所被仰出也、中山城前司奉行之云々」とある。

- (32) 「鎌倉年代記裏書」（『増補続史料大成』51所収）嘉元3年5月4日条。「駿河守宗方被誅、討手陸奥守宗宣、下野守貞綱、既欲攻寄之處、宗方聞殿中師時館禪閣同宿、騷擾、自宿所被參之間、隠岐入道阿清（時清法名）為宗方被討訖、宗方被管於処々被誅了、（後略）」とあり。

- (33) 佐藤進一「鎌倉幕府政治の専制化について」竹内理三編『日本封建制成立の研究』吉川弘文館、1955年、所収。

- (34) 佐々木系図、『続群書類従』第五輯下系図部。

- (35) 元徳元年12月22日崇顕〈金沢貞顕〉書状、金沢文庫文書、『鎌倉遺文』第39巻30829号。

- (36) 『明月記』（国書刊行会版）貞永2年3月4日条。「隠岐之守護佐々木左衛門、以八島冠者先年於今熊野邊被追討者子、為讃岐（隠岐力）守護代、雖謀反者子、已成父子之儀多年、已以出雲守護代男為使、遣讃岐国（隠岐国力）之間、

無是非擊殺出雲守護代、一島勒精兵構城郭、出雲又発兵雖欲渡彼島、島船津為嶮岨、渡者難方舟、當時只発精兵廻籌策云々、若及重事者彌為天下之煩歟、六波羅使往反出雲無隙云々」とあり。

- (37) 犯罪人追捕は守護の業務。守護政義は刃傷狼藉人の杵築社神主を鎌倉に注進。身柄召進を命ぜられている（注28・『吾妻鏡』天福元年6月20日条参照）。

- (38) 宝治2年4月25日佐々木泰清下文、隠岐村上文書、『鎌倉遺文』第10巻6962号。

- (39) 竹内理三『律令制と貴族政権』御茶の水書房、1958年、442頁。

- (40) 新城常三「国衙機構の一考察—一船所について—」『対外関係と社会経済』塙書房、1968年、所収。

- (41) 北条貞時十三年忌供養記、円覚寺文書、『神奈川県史』資料編2・古代中世（2）2364号。

- (42) 『増鏡』第二十「月草の花」。

- (43) 注(40)に同じ。

- (44) 「古本伯耆巻」（平泉澄『名和世家』日本文化研究所、1953年、所収）。「長高何ニ武シト申トモ無勢ニテ候へハ何事力候ヘキ、時剋ヲ不移早寄給へ（と清高が）申ト、加茂ノ梶岡入道ト名乗テ唯今来タルモ被仰候ニ不違候、サラハ打立ヤトテ寄ントス、執事田所カ申ケルハ、此御計楚忽ニ存ジ候、是程ノ大事ヲ思立候者ハ、手ガラム謀モサル仁ニテゾ候覧、何様所々ニテ待候覧、無案内ニテハ可為難儀候、曉ニ成テ可被寄候ト申ス」とある。この史料は流布本『伯耆巻』とは異なり、中世の作にかかるゆえにその価値は高い。なお清高軍勢にみえる加茂梶岡入道なる者は、島後穂地郡の海辺の村の加茂に住んだ武士である。田所が動員した兵ではなからうか。

- (45) 元弘3年5月近江番場宿蓮華寺過去帳、群書類従本、『鎌倉遺文』第41巻32137号。なお清高の祖父時清の弟に頼清がおり、その孫である頼信は遁世の身でありながら清高と行動を共にしたらしく、同処にて自害している（佐々木系図『続群書類従』第5輯下、326頁）。

- (46) 五宮守良親王令旨、近江多賀神社文書、『鎌倉遺文』第41巻32160号。

- (47) 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』下、東京大学出版会、1988年。
- (48) 「師守記」暦応4年3月25日条、『大日本史料』6篇之6、694頁。
- (49) 石井進『中世武士団』小学館、1974年、211頁。
- (50) 拙著『蒙古襲来』吉川弘文館、2007年。

〔付記〕隠岐の島町教育委员会主任文化財調査員岩崎ことい氏をはじめ、西ノ島町、海士町、知夫村の文化財関連の方々から多くのご教示をいただきました。記して深謝申し上げます。

